



開港50年祭を祝う人々

第一次世界大戦の好景気を反映して老いも若きも心から祝賀気分になり、狂喜乱舞、空前絶後のお祭り騒ぎであったという。



開港50年祭

大正10年3月20日から3日間、市制実施30年とあわせて、神戸開港50年祭が盛大に催された。当時の神戸市は、須磨町を合併し、人口608,644人であった。



貿易製産品共進会会場

商業館（元の兵庫区役所）でしばしば博覧会が催された。第1回日は、明治44年3月15日から5月13日まで開催された。



元町3丁目から4丁目方面を眺める（大正中期）

神戸開港を機に全国から人が集まり、またたく間に家が増えたことから、誰いうとなく、「この辺は神戸の元の町や、元町や」と呼ばれるようになったといわれている。



第1回みなと祭（昭.8.11.7）

神戸港修築工事完成のお祝いと第一次世界大戦後の景気回復の願いも込めて3日間にあたり盛大に開催された。



大倉山 伊藤公銅像（明治後期）

明治43年まで安養寺山と呼ばれていたが、この山に別荘をもっていた豪商・大倉喜八郎男爵は、伊藤博文がハルビンで殉じた時、同公の功績顕彰の場にしてほしいと神戸市へ寄贈、以来、大倉山と呼ばれている。